

火野葦平「恋と牡丹」論

— 『聊齋志異』「葛巾」の改変から見る主題 —

増 田 周 子

はじめに

火野葦平には『聊齋志異』を元に改変し、再小説化した作品群がある。筆者が調査した限りでも、およそ、一〇作は判明している。しかし、これまで、戦争文学作家として世に知られている火野葦平の『聊齋志異』関連作品は、ほとんど研究されてこなかった。念のために、調査した限りの『聊齋志異』関連作品と、その典拠について表にしてあげておく。

作品タイトル	発表年月日	発表雑誌・単行本	典拠『聊齋志異』題名
「首を売る店」	一九二五年七月一〇日	『首を売る店』（内藤奎運堂）書き下ろし	「陸判」
「王六郎」	一九四九年一〇月一五日	『別冊 小説新潮』	「王六郎」
「画壁」	一九五〇年一月一日	『世界春秋』	「画壁」
「恋と牡丹」	一九五〇年二月一日	『文芸読物 別冊名人会』	「葛巾」
「白い顔に黒い痣」	一九五〇年二月一日	『読物時事』	「瑞雲」

作品タイトル	発表年月日	発表雑誌・単行本	典拠『聊齋志異』題名
『妖亀伝』	一九五〇年五月一日	『小説公園』	『申氏』
『淫神』	一九五三年一月一日	『読物りべらる』	『申氏』
『鵲変化』	一九二五年二月一日	『小説と読物』	『五通』 『五通二』
『糞尿譚』後「中国糞尿譚」と改題	一九五〇年四月一日	『オール読物』	『阿英』
『取りかえはや物語』	一九五〇年二月一日	『キング』	『画皮』
	一九五一年二月一日	『キング』	『陸判』

『聊齋志異』は、作者は、蒲松齡（一六四〇年～一七一五年、没年不詳）である。聊齋とは、作者の号および、書齋の名で、『聊齋志異』とは、「聊齋において怪異譚を記す」という意味を示す。内容は、神仙や幽霊や狐狸の怪異譚で、世間に口伝されていたものを筆記し、まとめたものである。日本では、江戸時代後期に伝わり、上田秋成など江戸を代表する作家にも多大な影響をもたらした。¹⁾その後、数多くの日本の近代作家達に親しまれることになる。小金井きみ子は、『聊齋志異』の「画皮」を訳し「皮一重」²⁾として発表し、『東洋画報』（一九〇三年三月創刊）の編集責任者であった国木田独歩も、『東洋画報』に毎号のように『聊齋志異』を翻訳して掲載し、国木田独歩と蒲原有明の『聊齋志異』訳を収めた『支那奇談集一～三編』（一九〇六年四月、近事画報社刊）を発売した。一九二〇年代に『聊齋志異』を訳した、柴田天馬は、「若し『支那の稗史小説の類で、最も多く読まるゝは何か』と問ふ人があつたならば『聊齋志異』と答ふるに躊躇せぬ。実にこの書ほど面白く、この書ほど文章が立派で、この書ほど読みあかぬものは無い。（中略）文学を解するほどの支那人が『聊齋、聊齋』というて此書を愛読するも当然のことである。」³⁾と述べている。このように、『聊齋志異』の話の内容が面白いと思った知識人や作家らに、進んで翻訳され、『聊齋志異』は、

日本で広く流布していったのである。

日本の近代作家を代表する芥川龍之介は、『聊齋志異』の名前に近づけた「椒図志異」と題するノートを持っていたし、『聊齋志異』の「酒虫」を典拠として「酒虫」（『新思潮』一九一六年六月一日）を著した。また、佐藤春夫も『玉簪花』の中に収録した「緑衣の少女」「恋するもの道」「碧色の菊」など、『聊齋志異』を典拠とした作品を数多く残している。太宰治「竹青」（『文藝』一九四五年四月一日）も『聊齋志異』の「竹青」を典拠としてアレンジしたものである。

芥川龍之介、佐藤春夫、太宰治など日本を代表する近代作家達の『聊齋志異』関係作品は、これまでもかなり詳しく研究されてきた。研究が進んでいるといえる。火野も、他の近代作家と同様に、『聊齋志異』に親しんでいたのに、先にも述べたが、火野の『聊齋志異』関連作品は、近年まで無視に近い状態であったが、二〇〇八年以降、筆者は少しずつ、研究を進めている。火野の『聊齋志異』改変作品を研究していくと、そこには、作品一つ一つに深い意味が込められていることがわかった。一見、男女の恋物語や、妖怪談を描いているかのように見えながら、作品には、戦争の反省や、敗戦の思い、戦後のGHQの支配下における混乱の様相に対する考えや反発など、同時代の忸怩たる思いが内包されていることもある。

本稿では、火野の『聊齋志異』物から、「恋と牡丹」という作品をとりあげる。火野の「恋と牡丹」と、その典拠『聊齋志異』の「葛巾」を比較検討し、どのような改変を火野が施したのか、そして、作品に込められたテーマはどのようなことか、詳しく述べていきたい。

一、火野葦平が参考にした『聊齋志異』

さて、「恋と牡丹」を考察するにあたり、火野はどのようにして『聊齋志異』を知ったのか、そして、どんな『聊齋志異』を読んだのかを整理しておきたい。火野は、『美女と妖怪―私版 聊齋志異』の「あとがき」で、

早稲田文科時代、私は杜小陵と李太白との詩に惹かれて、自分も漢詩をつくつたりしたことがあつた。私のやうな浅学な者はたちまちそのむつかしさに辟易してやめてしまつたが、それがきつかけとなつて、両詩人の唐本詩集とならべて、商務印書館版の「古今奇観」や「聊齋志異」を机上におくやうになつた。そして、それを漢和辞典をひきながら熱心に読み、興趣のつきざるものをおぼえた⁽⁵⁾

と記している。火野は早稲田文科時代の一九二〇年代に、漢詩を愛読し、自らも漢詩を作つたり、中国文学に親しんでいた。そして漢文で辞書を引きながら、『聊齋志異』を読んでいたのであつた。火野は、『聊齋志異』の「むつかしさに面倒くさくなつて投げだしてしまつた。それから、後年、柴田天馬氏の名訳が出るにいたつて、さらに往年の感動を新にしたのである。柴田氏の訳文は原語をたくみに生かした実に気のきいたもので、その親切な註解とともに、昔、中途半端にしか読んでゐなかつた私をすこぶる満足させてくれた」という。つまり、火野は、原文で読むことはあきらめ、柴田天馬訳で『聊齋志異』に親しんだのであつた。ちなみに、商務印書館版発行の『聊齋志異』だが、火野の通つた早稲田大学図書館ならびに国立国会図書館に所蔵されているものがある。これは、一九二五年以前の発行のものと考えられる。

さて、柴田天馬訳の『聊齋志異』は、一九一九年一〇月に玄文社から、一九二六年三月には、第一書房より刊行されている。また、柴田天馬訳は一九三三年にも第一書房から発刊されている。火野が何を手元に置いていたのか、蔵書記録が残っていないことと、戦前に文学廃業宣言を火野自身が行い、売却したこともあり、不明であるが、火野はこれらの柴田天馬訳を読んだのであろう。また、火野は、「終戦後は、北京からかへつてきた村上知行氏の訳が出版された。これはまた原文を思ひきつてくだいてしまった平易な文章で、柴田氏とは、別個の味はひがあつた」と述べている。一九五三年に『聊齋志異』物の最後「妖龜伝」を発表するまでに、村上知行訳『聊齋志異』は、一九四七年一二月に光文社から『聊齋志異香艶抄』、一九四九年五月に村上知行訳『もだんらいぶらりい 聊齋志異上巻』（東西出版社）などが発刊されている。これらの、柴田天馬訳や村上知行訳の「聊齋志異」を読んで、先にあげた一〇作を書いたのだと考えられる。

さて、火野は「恋と牡丹」の典拠である『聊齋志異』の「葛巾」をどのように知ったのであろうか。火野が、漢和辞典を引きながら読んだと言う、上海商務印書館版の「聊齋志異」には、「葛巾」が掲載されている。また、先にあげた一九二六年第一書房版柴田天馬訳『聊齋志異』、一九三三年の第一書房版には、「葛巾」は掲載されていないが、一九一九年一〇月の玄文社版『聊齋志異』には収載されている。また、村上知行訳『もだんらいぶらりい 聊齋志異上巻』にも「葛巾」は掲載されていない。

おそらく、火野は、漢和辞典を引きつつ苦しみながら一九二〇年代の上海商務印書館版の「聊齋志異」を原文で読んだか、一九一九年一〇月発行の柴田天馬訳玄文社版『聊齋志異』で「葛巾」を読んだのであろう。

一 「恋と牡丹」の成立

「恋と牡丹」は、『文芸読物』一九五〇年二月一日に、山崎百々雄の挿画を入れて発表された。その後、次の四冊の作品集に収録されている。

『中国艶笑風流譚』（一九五二年一月一〇日、東京文庫）

『美女と妖怪―私版 聊齋志異』（一九五五年七月一日、学風書院）

『中国艶笑風流譚』（一九五六年二月一〇日、学風書院）

『中国艶笑物語―私版 聊齋志異』（一九五六年三月五日、河出書房）

最初の収録本の『中国艶笑風流譚』は、『日本艶笑滑稽譚』（一九五五年二月一〇日、東京文庫）をはじめとして、〇〇譚計七冊のシリーズの二番目の作品集である。火野は、中国の艶笑物の風流譚の一部として、「恋と牡丹」を発売したのであった。多少、句読点などが削除されたり加わったりしているが初出「恋と牡丹」と四冊の収録本は、ほとんど変化がなく、火野は収録にあたって大幅な書き換えなどはおこなっていない。よって、本稿では、『中国艶笑物語―私版 聊齋志異』をテキストとし、一九一九年一〇月の柴田天馬訳玄文社版『聊齋志異』「葛巾」を使用して、「恋と牡丹」との比較を考えてみる。

二 火野葦平「恋と牡丹」と『聊齋志異』「葛巾」比較研究

a 『聊齋志異』「葛巾」

さて、「恋と牡丹」と比較するにあたって『聊齋志異』「葛巾」のストーリーをまとめてみたい。

洛陽に常大用という牡丹好きの男がいた。常大用は、適齢期になっても女性には目もくれず、始終牡丹に勝る女性などいないと、美しい牡丹ばかり追い求めていた。曹州の牡丹は、他の土地よりもずっと美しいと言われていたのを伝え聞き、偶々用事があつて曹州に立ち寄つたことをきっかけにそこに住むことにした。常大用がある朝早く花の咲いている場所に行くと、葛巾という娘と娘に仕える老婆がいた。葛巾の余りの美しさに、常大用は神仙ではないかと口走ってしまう。老婆は失礼なことを言うど怒鳴りつけ、そんな出鱈目を言うなら警察に突き出すぞと脅し、二人で去つて行つた。常大用は、罰を受けると怯えていたが、その日以来、葛巾のことが忘れられず寝込んでしまった。すると老婆がやってきて、葛巾自ら鳩湯を調合したので、常大用に飲むようにと渡した。鳩湯は太古の昔から有名な毒薬であつた。毒薬でも、今の恋煩いで苦しむよりはましだと、一気に飲み干した。毒だと思つたが、それは、良薬で、常大用はすっかり回復した。ある日いつものように常大用が花園を歩いていると、葛巾がいた。常大用がひれ伏すと起こし、夜に自分の部屋に来るように言つた。常大用は、魂が飛んでしまつたような夢見心地で、葛巾の部屋を訪れたが、老婆が傍にいて入れなかつた。仕方なくあくる日に行くと、今度は妹の玉版が来ると言うので、寝台の下に隠された。玉版は碁の勝負をしようと言つて姉を連れ出した。常大用は、葛巾がいなくなつたのが残念で、部屋にあつた水晶を懐に入れて家に帰つた。それから毎晩のように葛巾は常大用の家にやってくる。来るたびにこの上なくいい香りがするのである。女はお金が尽きた常大用に不思議なまじないで金をわたし、そして一緒に逃げようと言ひ出し

た。常大用が先に帰ることになったが、実家に戻るとすでに葛巾が到着していた。こうして常大用は葛巾と結婚をした。常大用の弟大器も、葛巾の妹の玉版と結婚させることになった。二人の兄弟は、美しい姉妹と結婚し、家も栄えたのであった。ある日盗人が大群で家にやってきた。盗人たちはお金を要求し、人間離れた美人の妻たちに会ってみたいと要求した。妻たちは、自分たちは仙女であると言つて威厳をもつて盗人に相対した。すると盗人は委縮して立ち去つた。二年ほどすると、めいめいの妻たちはそれぞれ一人ずつ子を産んだ。常大用は、葛巾は仙女だとはつきりは知らなかったが、ずっと疑つていた。ある日、妻たちが自分たちの旧姓は魏で、母は曹国夫人に封ぜられていると言つた。そこで、常大用はこっそり曹州に行き、魏姓を捜したが見つからなかった。そこで、前に住んでいた家に行つてみた。すると壁には曹国夫人に贈るといふ詩が書かれてあつた。家の主人に尋ねると、曹国夫人とは曹州第一の牡丹の名であると言ひ、その牡丹を見せてくれた。それは葛巾紫であつた。こうして常大用は、葛巾と玉版は花の妖怪であると悟るのである。常大用は妻に問いただすことはしなかつたが、ただ曹国夫人の詩を口ずさんだ。すると、葛巾は顔色を変え、あれほど自分を思つてくれたので、あなたに身をまかせたのだが、素性を知られては、もう一緒にはいられないと、玉版といっしょに子供を遠くになげた。子供たちは下に落ち、消えてしまった。それから数日たつと、子の落ちたところに二株の牡丹が生え、その年のうちに紫と白の牡丹になつた。数年で草むらのように繁つたので他人に分けた。こうして、この珍しい牡丹のおかげで常大用の家は洛陽でならぶものがないほど栄えていったのであつた。

以上が『聊齋志異』「葛巾」の内容である。『聊齋志異』「葛巾」は、牡丹好きの常大用が、葛巾紫という牡丹の妖怪である精霊が人間の姿に化けた葛巾という女性に会い、魅了され、結婚し、常大用の弟も葛巾の妹の玉版と結婚し、それぞれも生まれ、家も豊かになる。だが、葛巾が妖怪だと暴露され、眞実がばれたことで、葛巾と玉版は、自分

の子供を窓から投げて落として、消え去ってしまった。しかし、子が落ちた場所から、紫と白の美しい牡丹が咲き、それが、評判になり、牡丹を求めるものがたくさん訪れ、常家は繁栄していく。つまり、妖怪は素性を知られ、去ってしまったても、常大用らの家を守るという話で、作品の最後はハッピーエンドで終わる。

b 火野葦平「恋と牡丹」と『聊齋志異』「葛巾」

さて、火野の「恋と牡丹」は、先に説明した『聊齋志異』「葛巾」とほぼ同じ内容展開である。ただ、『聊齋志異』「葛巾」が柴田天馬訳で、およそ八六〇〇字であるのに対し、火野の「恋と牡丹」は約二三二〇〇字くらいで、二倍以上の長さに加筆している。火野が直筆の「恋と牡丹」の「創作ノート」をノート二枚分残しているので翻刻、紹介しておきたい。

常大用

常大器（弟）

桑バアヤ

鄭シモベ

○曹国夫人（牡丹の名）―その種は、葛巾種

恋と牡丹

○葛巾と知りあひになる。(牡丹好き、牡丹なんかどうでもよくなる)

鳩湯

●恋わずらひ

○ネンゴロニナル。

○葛巾姉妹、碁を打つてゐる。(呉清源 本因坊)

○「君子かと思つてゐたら、どろぼうだつたのね」

如意

○金トリダス―旅費不足

○カケオチ。

○二組の夫婦。

盗人襲来―

○素性を根ホリ葉ホリたづねる。―そつとしらべに行く。

曹国夫人にささげるの話。

「アンタハバカネ。」

○二人、子供ヲ投ゲテ去る。

○莫大ナ牡丹園。―「牡丹ナンカ、イラン、スカン、カエツテ来イ」

火野葦平「恋と牡丹」論 ―『聊齋志異』「葛巾」の改変から見る主題―(増田)

○牡丹と尽くすのいやになる。牡丹恐怖症。

この「創作ノート」は、火野が『聊齋志異』『葛巾』を読み、重要点をメモしたものである。最後には、「恋と牡丹」のテーマにつながる「牡丹恐怖症」という言葉が記されていることに注目しておきたい。この点の詳細については後述する。

ここからは、どのような加筆を施しているのかを説明しながら、作品の考察をしていきたい。まず、『聊齋志異』『葛巾』と「恋と牡丹」とで、根本的に異なるのは、「葛巾」にはなかった語り手が「恋と牡丹」には登場するという点である。また、登場人物の心理描写が、「葛巾」よりかなり増えている点も特徴と言える。まずは、語り手の言説に注意しながら「恋と牡丹」を考えていこう。

「恋と牡丹」は語り手の「これは、人間の愛情、とくに男女間のそれについて、きわめて教訓となる物語である。もし読後、なんの教訓も得られなかったとしたら、それは読者の方に罪がある、と承知されたい」という言説からはじまる。すなわち、読者は、男女間の愛についての何らかの教訓が示された話であると承知しながら、作品を読み進めることになる。

さて「恋と牡丹」でも、牡丹好きで、なかなか妻を娶ろうとはしない常大用が登場する。ただ、『聊齋志異』『葛巾』とは違って「恋と牡丹」では常大用のことは「美男子で、誠実で、温和で、やさしくて」と詳しく形容されている。女性より牡丹が好きで適齢期になっても結婚しようとしないうところも、『聊齋志異』『葛巾』と同じ内容であるが、兄の常大用をさしおいて弟の神器を先に結婚させることはできないから、早く結婚するように勧められると、時代性が感じられる次のような言葉を常大用が話す。

「そんなことは、封建的ですよ。もう時代がかわって、新憲法ができたんだから、そんな因習にこだわることはありません。弟が妻帯して、この常家も、大器が継いだらいいんだ」

ここには「時代がかわって、新憲法ができた」とある。日本の戦後を表す言葉であり、『聊齋志異』「葛巾」とは異なり、「恋と牡丹」が、戦後の時代状況と関わることを暗示している。

常大用が曹州に行き、葛巾の余りの美しさに、神仙ではないかと口走ってしまい、恋煩いで寝込み、鳩湯とうそをつかれて良薬を飲まされるところも『聊齋志異』「葛巾」と同じである。夜に葛巾の部屋を訪れるように言われたが、妹の玉板が来て隠され、部屋にあった水晶を懐に入れて家に帰るところも同じで、やがて恋におち、常大用は葛巾と結婚し、玉板と常大用の弟大器も結婚する。語り手の言説の中で、重要点を示していく。まず、常大用が葛巾を初めて見たとき、語り手は次のように語る。

常大用は、文字どおり、しばらく開いた口がふさがらなかった。一代の確信がゆらめきずれる瞬間というものは、人間にとって簡単なときではない。さまざまの複雑な感情や想念が渦をまく。敗北感は耐えがたい。しかし、新に得た知識に敏捷に身をゆだねることで、絶望からはまぬがれ得る。転身と転向はオポチュニズムの切実なる変形である。常大用も、利那のあいだに、ともかく、その転向を完了した。しかし、なお、彼は、それを人間と考えてしまうまでには、転向しきれなかった。

この文章は、全く『聊齋志異』「葛巾」にはなく、「恋と牡丹」のみに描かれる。大袈裟な表現だが、常大用は、

今まで、牡丹以上に美しい女性などと思つていたが、眼前に、信じがたいほどの絶世の美女を見て、牡丹が世界で最も美しいなどと思うことは、すっかりやめた、すなわち「転向を完了した」のである。しかし、美女を人間と思つるまでは、「転向しきれなかった」と記している。ストーリーに即すと、以上のような内容だが、「一代の確信がゆらめきくずれる瞬間」「敗北感」「新に得た知識に敏捷に身をゆだねる」「転向」「オポチュニズム」など、奇妙な言葉が連なる。何故であろうか。火野葦平は、先に表にした『聊齋志異』改変作品のほとんどを戦後に執筆している。火野葦平は、志賀直哉らの必死の嘆願にも関わらず、「日華事変以来同人は戦争に取材せる多数の著作を発表し、世に迎えられるものであるが、その著作に於て、概ねヒューマニズムの態度を離れなかつたとは云へ、『陸軍』『兵隊の地図』『敵将軍』『ヘイタイノウタ』等に於ては、日本民族の優越感を強調し、戦争、特に太平洋戦争を是認し、戦意の昂揚に努めて居り、その影響は広汎且つ多大であった。以上の理由により、同人は軍国主義に迎合して、その宣伝に協力した者と認めざるを得ない」ということ⁽⁹⁾で、一九四八年五月二五日から、一九五〇年一〇月一三日まで公職追放された。火野は公職追放中の時期について次のような言葉を残している。

終戦直後、私は追放をうけて、しばらくペンをしばらく使われていた時期があつた。執筆禁止ではなかつたが、内容を制約されたため、私は窮して、救いを「聊齋志異」に求めた。そして、柴田氏版を参酌しながら、自分流に勝手に書きあらためた「私版聊齋志異」物語を時折ものにした。二年ほど後、追放を解除されたときには、それが十篇ほどもたまつていて、私の頭上にあつたときに、いかに「聊齋志異」がよき友であつたのかと感謝の念がおさえがたいのである⁽¹⁰⁾。

すなわち、『聊齋志異』改変作品は、戦後、まもなくの公職追放中に描かれたのである。こうして見ると、先にあげた語り手の言葉は、戦後の日本と関係していると考えられる。日本の敗戦や、その後の急激な変化、そして、国民の、とりわけ軍人たちの転向などが暗喩されていると読めるだろう。「転身と転向はオポチュニズムの切実なる変形である」ともあり、転身と転向は、一見すると良いように考えられるが、単に日和見主義で、自分に信念がない戦後の人々のことを揶揄している。常大用が葛巾を仙女ではないかと疑い、その声をかけたとき、老婆に無礼だと叱責される場面がある。常大用のその時の心理状態を語り手は次のようにコメントする。

大用は、館にかえつてくると、どっと重い床についてしまった。いろいろなものを打ちくだかれたのである。大用の人生はこのときを境に、百八十度の大転換をした。それは、日本が原子爆弾を見舞われて、全面的降伏をしたのに似ている。床についた大用の頭のなかは、颱風のようで、彼はその衝動と心痛とのために、急速に憔悴した。

(とりかえしのつかぬことをした。まったく軽はずみであった。(中略)警察につきだされる。破滅だ)

この語り手の言葉も、戦争と関係している。常大用の後悔を、日本が原爆を落とされ、「百八十度の大転換」をし、「降伏」したことと同様の重みで描いている。常大用の心理は、まるで、戦争に行った日本軍人や日本国民のような人々が、戦後、感じたこととして書かれるのである。常大用の次の描写もある。

逮捕の不安と、恋慕の狂熱とで、常大用は、眠るところではない。食欲もおこらず、芋虫のように蒲団のなか

をころげまわるばかりである。そして、ときどき、童子のように泣いた。そうして、三日間が経ち、大用は線香のように瘦せほそった。

数日が経過しても、娘への無礼にたいして、詰責にも、逮捕にも来る様子がないので、その点はほっと胸をなでおろしたが、自分の憔悴に気づくと、
(ひよっとしたら、死ぬかも知れない)

大用は、すこぶる心細くなった。

この常大用の怯える描写は、公職追放に怯える、火野の心理とも繋がるだろう。さらに「恋と牡丹」には次のような描写がある。常大用と大器が結婚した後、盗賊が、常大用の家にやってくる場面である。

騒然たる物音が、邸前におこった。深夜である。騎馬の音がひしめきあい、口笛と、槍と、鎧の音が、これにまじった。常大用夫婦は、まだ起きていた。

「賊らしいわ」

葛巾のその言葉で、一家の者ごとごとく、揃って、楼にのぼった。数十騎の集団をなした騎馬剽賊は、侵入してきて、楼をとりまいた。

こうして賊は、三つの要求をする。一つ目は、牡丹の花鳥を見せて欲しい、二つ目は、自分たち五八人の一同に「五百金」という大金が欲しい、三番目の要求は、「世にもまれの麗人」と噂される葛巾姉妹に直接会い、拝顔したいと

いうものだった。常大用は、三番目の要求は駄目だと断った。この場面は、『聊齋志異』「葛巾」にも同じようにある。ただ「牡丹の花鳥を見せて欲しい」という要求は、『聊齋志異』「葛巾」にはなく、二つしか要求が書かれていない。『聊齋志異』「葛巾」では、常大用が「警が有るのか？」問うと賊が「警は無いんですが、但だ両つだけ要求があつて来たんです」と答える。「恋と牡丹」では、盗賊は、「侵入してきて、楼をとりました。」そして常大用が「警がないのに、どうして、夜陰、そんなものしい襲撃をするのか」と尋ねる。この常大用の「警がないのに、どうして、夜陰、そんなものしい襲撃をするのか」という言葉は、「恋と牡丹」にしか描かれない。これは、日本軍の中国侵略をイメージさせる言説である。日本軍は、日中戦争の際、何の恨みもないのに、ただ、自国の欲と傲慢さゆえに侵略していったのである。そして三番目の要求が断られると、盗賊は次のように語る。

「われわれ、ひとたび立てたる目的は、かならず貫徹するというのが、泥棒の仁義である。鉄の規律といつてもよい。それは、暴力をもつて戦術の第一とする徒党の貴重なる原則だ。共産党と同様である。人の迷惑など、かまっておられない。もし、余の要求にしたがわぬ場合は、楼を焚くばかりである」

そういつて、賊将は部下に命令して、薪の火をいちだんと燃やし、楼へ近づけしめた。

この盗賊の言葉も「恋と牡丹」にしかない描写である。「警」すなわち、憎しみや恨みもないのに「暴力をもつて戦術の第一とする」というところから、日本軍の勝手きままる暴力的侵略、戦争の様子が浮かび上がってくる。言うとおりにしないと、火をつけるぞと脅すのである。ただ、ここで、賊の様子を「共産党と同様」と述べている点に注目したい。「恋と牡丹」では、賊の姿に日本の戦前の軍隊を喩えながら、同時に共産党批判もしている。自分たちの

意見と違つと殺したり、拷問したりする共產党のいわゆる肅清は、ソ連では、一九三〇年代頃からおこなわれ、日本人も多く犠牲になつた。⁽¹⁾火野は、日本の起こした戦争と、共產党の厳しい規律を守らなかつたら肅清するという態度、どちらも批判的にとらえ、「恋と牡丹」の内容に組み込んでいる。この盗賊を鎮めるのが、葛巾姉妹である。「(前略)止むを得ません。ここまできて、あたしたちが出なかつたら凶事がおこります。心配せず見ていてください」と盗賊の前に姉妹は出て行つた。

肩を組んで、美しい姉妹は、下からの焔に照らされて、燃えかがやいているように見えながら、階段を一段一段と降りて行つた。(中略)

「さあ、とくと、わらわらが顔を見るがいい」(中略)

葛巾と玉板とは焔の中心にあぶり出されたようになっていたが、このとき、姉の顔に怪しいひらめきがおこり、その妖艶な顔に、するどく嚴肅なものがみなぎつた。神々しい光があらわれて、盗賊どもを威圧した。怒つたのである。

こうして、怒つた葛巾姉妹は、暴力も使わずに、神仙の力を持つて賊を制した。葛巾姉妹は「賊党ども、驕慢がすぎようぞ、これまで讓歩したのに、なにをまだ要求するのか。わらわら姉妹を手ごめにする所存とみえる。今こそ、そなたらにいきかせる。わらわら姉妹は、仙媛である。わけあって、しばし、この俗世に姿をおいでするものである。なんで、とるに足らぬものとり輩を恐れようぞ」と述べ、仙媛の力を使って追ひ払おうとした。こうして、「神格のものゝ顕現する魔力は、悪漢たちをふるえあがらせた。葛巾の言葉の終るか終らぬうちに、五十八騎の扁盜は、

雲を霞と退散したのである。彼等は、第二の要求の五百金ずつも得ずじまいであった。棲の上にいる常大用や大器には、姉妹と賊とのやりとりは聞こえず、はらはらしながら成り行きを注視していた。ただ「葛巾がなにごとかを喫ると同時に、泥棒たちが蜘蛛の子を散らすように、四散した」のである。葛巾姉妹は、何を比喩しているのだろうか。戦争をおこす者たちや、肅清をしようとする者など、独裁的な横暴者たちを追放する者として登場する。すなわち、平和の象徴を表すとも言えるだろう。

この日以来常大用は、賊が追い払われて良かったと思いつつも、姉妹を「仙女では、ないであろうか」と疑うようになる。そして二年が経ち、常大用も大器も子どもが出来、一家は富み栄え、幸せに暮らすのだが、とうとう妻達の素性を知りたくてたまらなくなる。そして常大用は夜毎に、葛巾の姓を教えてほしいと頼むようになった。こうして、常大用は、葛巾から姓は魏で、母は「曹国夫人に封ぜられ」ていることを教えてもらう。「恋と牡丹」では、語り手は、そんな常大用の様子を次のように描く。

起さんでもよいところへ波瀾をおこす好事の魔というものは、こういう余計な好奇心のなかに、いつも潜んでいる。愛情はいくらこまやかでも、連続しておれば、いつか倦怠の気をさそいだして、なにかの変わった刺戟が欲しくなる。人間はそういう滑稽な資質なのだから、仕方がない。常大用も、妻の愛情に溺れきっておればよいものを、ふいと、そういう贅沢心に見舞われた。

ついに、人間は、日ごろの幸せを忘れて、とうとうまた、刺激を求めてしまう。「起さんでもよいところへ波瀾をおこす好事の魔」とある。これは、常大用の好奇心というような意味だろうが、戦争とからめると、平和な世の中が

続くと、何か刺戟を求めて争いをしようとするという意味にもとれる。さらに、素性を確かめたくなった常大用は、妻には曹州とは逆の方向に行くと言つて、曹州に葛巾姉妹の先祖を尋ねに行つた。語り手は次のように言う。

神仙も、あまり愛欲でうつつを抜かすと、神経も鈍磨するとみえて、大用のそんなちやちなづくりごとにも、そのときは、気づかなかつた。もし、そのとき、夫が曹州へ旅経つと知つたら、また妖術によつて、策を加えることができたかも知れない。知らぬが神なのであつた。

そして、とうとう常大用は、曹州で老人に教えられ、葛巾が葛巾紫種の牡丹で、母は曹国夫人という名前の牡丹だと気づく。「もはや、疑う余地はなかつた。(やっぱり、仙女であつた。妻は花妖だ)。「もう大用は沈黙と忍耐とにたえ得なかつた」。そして、家に帰つて、それとなく葛巾に真実を知つたことを伝える。すべてを葛巾は悟つてしまつた。すると、素性を知られては、もう一緒にはいられないと、玉板といつしよに子供を投げた。子はそのまゝ消え、数日が経つと子の落ちたところに二株の牡丹が生え、その年には一つは紫、一つは白の花が咲いた。「花びらは巨大の盆のようで、強くふくいくとした芳香は常家はもとより、近隣にいたいひろまり、風に乗ると、五里の先までもにおつた」。数年で草むらのように繁り、株をわけて欲しいものがやってくるので、常大用の家は富み榮えていつたのであつた。ここまでは『聊齋志異』「葛巾」ともストーリー展開は同じである。だが、「恋と牡丹」では、ラストで常大用が「狂的な牡丹嫌い」「牡丹恐怖症」になる。「牡丹恐怖症」という言葉は先にも述べたが、「恋と牡丹」の「創作ノート」にも記されていた。「恋と牡丹」のモチーフとして非常に重要なのである。常大用は、「牡丹の花のないところ、においのせぬところを選んで逃げまわつた」「道傍で、牡丹の花を見つけると、卒倒して泡をふいた。」まさに

「牡丹癩癩」であつたと描かれている。したがって、牡丹だらけの家には常大用はおられずに「放浪者となつた」のである。常大用はこのように言う。

彼は、牡丹というものがこんなにも沢山地上にあつたのかとおどろく。どこに行つても、牡丹だらけだ。発見というものは、こういうぎりぎりのところに落ちて、はじめて眞実となるかも知れない。

葛巾の素性など知らなくても幸せなのに、つい追及してしまい、不幸になる。そして後悔は、落ちぶれてこそ初めて気がつく、というように読めるだろう。しかし、常大用が牡丹を毛嫌いするのはどうしてだろうか。牡丹は、人間の好奇心、すなわち欲とも読めるだろう。欲は「こんなにも沢山地上にあつた」のである。欲に溺れて、とうとう破滅してしまつた男が常大用で、いまさら後悔してもどうしようもないというように描かれている。すなわち、欲と好奇心に溺れて突き進むと、人間は、破滅してしまうということを表しているのではないか。先に「恋と牡丹」では、盗賊たちが、『聊齋志異』「葛巾」にはなかつた牡丹の花晶を見せてほしいと要求する場面が加筆されていることも指摘しておいた。これは、わざわざ火野が施した点で、悪党の賊は、好奇心と欲に満ち満ちていることを示しているのであらう。すなわち、俗物であればあるほど欲深いのである。

乞食同様となつた、常大用が、牡丹を見てひっくりかえつたとき、かならずくりかえすうわ言は、「葛巾よ、葛巾よ、もう一度おれのところへかえつて来い」というのであつた。

牡丹屋敷として栄えた常大用の華やかな最後は、記録にとどめられているが、ほんとうのその屋敷の主たる常

大用が、どこでのたれ死したのか、誰も知っている者がない。

「恋と牡丹」は、語り手のこの言葉で終わる。一見これは、葛巾という美女を妻にして榮えていた常大用が、好奇心から妻の秘密を暴いたために、全ての幸せを失い、のたれ死してしまつた話と読める。冒頭に示された教訓とは、男女の愛に対する教訓で、好奇心にまかせて、幸せそのものであるのに、むやみに夫婦や恋人の、秘密を探るべきではないという風な教訓であると解釈できるだろう。しかし、何度も述べているように、戦争と関係するように作品は描かれているので、戦争の教訓も、この文章には暗示されているのではないかと考えられる。先に葛巾は、盗賊を、追つ払つた平和の象徴で神々しいものとして登場することを記し、牡丹は人間の欲や好奇心を暗喩していると述べた。つまり、この最後の文章は、一時の欲や好奇心に翻弄され、そのまま突つ走つて自制心をなくし戦争をおこすと、とうとう、人間は破滅に陥り、どんなに、後悔しても決して戻れないという教訓を示しているのではないかと考えられる。そして、葛巾（平和の象徴）、すなわち平和をなんども叫び、「かえつて来い」と言つても、後の祭りで、二度と平和は取り戻せないということが表されている。常大用は「美男子で、誠実で、温和で、やさしくて」と形容されていることはすでに指摘したが、こんな温和で誠実な善人でも、欲にまみれると破滅してしまうという、人間の、そして一般大衆の、安易さと落とし穴へのはまりやすさを描出していると言えるだろう。火野は、あえて結末を『聊齋志異』『葛巾』のようなハッピーエンドにはせず、欲のために突つ走つたために大事なものを失つて「のたれ死に」する主人公の姿を示し、冷徹に描いたのである。「牡丹ナンカ、イラン、スカン、カエツて来イ」という言葉は、「恋と牡丹」の「創作ノート」にも記されていた。作品を描く前から、この結末を構想し、重要視していたのである。

以上、火野は、『聊齋志異』『葛巾』から「恋と牡丹」へと改変するにあたって、もともと戦争とはまったく関係な

かった、牡丹の美しい仙人と主人公常用の物語を、戦争と関連付け、当時の日本全体の、そして自身の従軍を後悔する心理などを投影させながら、平和を訴える物語へと創作しなおしたのであった。

終わりに

本稿では、火野のおよそ一〇作の『聊齋志異』関連作品の中から、「恋と牡丹」をとりあげ、『聊齋志異』「葛巾」と比較することで、火野の改変の様相や、「恋と牡丹」のテーマについて考察してきた。「恋と牡丹」は、一見、常用と牡丹の仙人葛巾との恋、別離、その後が描かれているように見えるが、その中には、戦争とその後悔、そして平和への強い思いが込められていた。『聊齋志異』「葛巾」を改変し、語り手を配し、登場人物の会話などを増やすことで、もともとはなかったテーマを「恋と牡丹」に組み込んだのである。火野のおよそ一〇作の『聊齋志異』改変作品は、そのほとんどが、公職追放中に描かれた。火野自身も、公職追放中に「私は窮して、救いを『聊齋志異』に求めた」と述べるが、公職追放中に、自ら従軍した体験を真摯に反省し、平和の意味をさぐっていた。そこで、戦争が何故起ったのか、平和世界実現のためにはいったい何をすればよいのか考えた。そして、おそらく、欲や安易な好奇心の世界に溺れないことが、平和を維持することにつながると考えたのではないだろうか。この「恋と牡丹」には火野の、執筆当時真剣に考え、戦後に取り組んだ平和への思いが込められているのである。

註記

- (1) 稲田孝『聊齋志異』(一九九四年四月一〇日、講談社)
- (2) 森鷗外『かげ草』(一九九七年五月二八日、春陽堂) 収録

- (3) 柴田天馬「序文」『和訳 聊齋志異』(一九二六年三月一〇日、第一書房)
- (4) 佐藤春夫『玉簪花』(一九二三年八月五日、新潮社)
- (5) 『美女と妖怪』私版 聊齋志異』(一九五五年七月一日、学風書院)
- (6) 『美女と妖怪』私版 聊齋志異』同
- (7) 本書には民国としか奥付が記載されていないが、関西大学図書館を通じて、レファレンス協同データベースに問い合わせてもらった。広告に一九二〇年代のものが記されているので、おそらく一九二五年以前のものとも見て間違いないとの回答を得た。
- (8) 『美女と妖怪』私版 聊齋志異』同
- (9) 火野葦平展運営委員会編『火野葦平展』(平成六年一月二七日、北九州市教育委員会)
- (10) 火野葦平「三十年愛読の書」(『底本 聊齋志異月報三』一九五五年八月三〇日、修道社)
- (11) セルゲイ・ミローノヴィチ・キーロフの一九三四年二月一日暗殺を受けて、スターリン反対派に対して一九三〇年代後半大規模な粛清を行うようになった。(藤本和貴夫「大粛清」Japanknowledge『日本大百科全書』参照)日本人では杉本良吉が一九三九年一〇月二〇日、スパイ容疑によりソ連に粛清されていることなどがあり、多数犠牲になっている。
- (12) 火野葦平「三十年愛読の書」同

本稿で紹介した「創作ノート」は、北九州市立文学館に収蔵されている。同館ならびに玉井史太郎様に感謝申し上げます。